日本語の反応詞について ―「あ」はどんな機能を持つか

On Japanese Reaction Words : the function of “*A*”

小　出　慶　一*

KOIDE Keiichi

１．はじめに――目的

何かを思い出して「あっ」と言ったり、バスが来たのを見て「あっ、バスだ」と言ったりする。また、会話など中で「あ、そうですか」などと「あ」が現れることもある。これらの「あ」は、なぜ現れ、どんな働きをしているのか、このような問題を考えることが本稿の目的の一つである。

また、日本語教育でも、早いうちから「あ」が教科書に現れる。たとえば、「あ、ちょっと待ってください」[i] というような表現は比較的はやく教科書に出現する。しかし、このような「あ」が学習項目として意識的に扱われることはあまりないように思われる。「あ」は意識的に扱う意味はあるのか、あるとしたらどんな点か、このようなことも考えてみたい。

「あ」などの語は、ヒトの内部および外部からの刺激に対する反応として現れる語であり、その性質を検討することで、ヒトの刺激への反応の仕方を知る手がかりになると思われる。また、これらの語の性質を知ることは、より自然な言語活動というものについての認識を深めることにもなり、言語教育の面でも有益であろうと思われる。

この稿では、このような反応を示す語の代表的なものとして「あ」という語を手始めに、他のいくつかの反応表現についても検討を加え、日本語の反応表現の概観を得たいと考える。

なお、以下では、「あっ」「あ」など同種のものの表記を「あ」という表記で代表させる。他の語についても同様である。

２．先行研究――富樫（2001、2002、2005）から

「あ」系の語について、より幅広い検討を加えているものは、富樫の一連の研究である（富樫2001、2002、2005）。森山（1989）、田窪（1992）、田窪・金水（1997）などの論考も、「あ」系に検討を加えているが、具体的な事例はほぼ挙げられていない。富樫の一連の論考は学ぶべきものが多い。見解を異にする点があるとしても、本稿の検討も、その研究に多くを負っている。この節では、その意味で、まず富樫の論考について見ておくことにしたい。

２－１．対象の分類基準

反応詞（富樫の用語では「談話標識」）の分類基準として、富樫は、次の①～③を挙げている。なお、ここでは、本稿の内容と直接の関係はないが、基準③の役割を示すために、「はい」類も含めて示す。「　」内は例である。

1. 富樫（2001）の分類基準（富樫2001 : 25）

* こいで・けいいち
埼玉大学教養学部教授，日本語教育

①発話冒頭以外に位置するか

「＊飛行機、あっ」「そうなんだ、ふーん」

②繰り返しの発話が可能か

「えっ、えっ、何？」「＊ふーん、ふーん、ふーん」

③独り言で発話可能か

これらの基準に従うと、次の３つの類に区分される。[ii]

1´ 富樫の３つの基準による対象の区分

	①	②	③
「あえお」類	×	○	○
「ふーん」類	○	×	○
「はい」　類	○	○	×

この区分の各類はそれぞれ心内での情報の扱い方の違いに対応している、というのが富樫の観察である。「あ」系と「は」系をおおまかに分けるものとして、①は有効だと思われるが、②の基準については内容がさほど明確ではないように思われる。「ふーん」が繰り返される場合もないとは言えないと思われるからである。

２−２．分析とその問題点

このような性質の違いを捉えるために富樫は、「バッファ／データベース」モデルとでも言えるような、心内での情報処理のモデルを提案している。このモデルでは、「基本的な情報処理操作は、バッファ（短期記憶）に、データベース（長期記憶）にある情報のリンクが書き込まれることで行われる」（富樫2001：24）とされている。６つの反応詞について、関連のある記述を引用すると、次のようになる。

2.「あ」系の機能

「あっ」：バッファにない新規情報を獲得したことを示す

「えっ」：バッファにある情報と新規獲得情報との一致率が低いことを示す

「おっ」：バッファにある情報と新規獲得情報との一致率が高いことを示す　（富樫2001：29）

3.「ふーん」系の機能

（DBは「データベース」の意）

「ふーん」：獲得情報がDBに書き込まれたことを示す

「へえ」　：獲得情報に肯定的属性を付与してDBに書き込んだことを示す

「ほう」　：獲得情報に強い肯定的属性を付与してDBに書き込んだことを示す（富樫2001：32）

このような分析ついて、ひとつ問題点を挙げたい。

それは、富樫の分析に用いられている情報処理モデルが妥当かという点である。モデルは事態を抽象するのに役立つ面もあるが、実態と乖離する危険を常に伴う。たとえば、「ふーん」について言われている「獲得情報がDBに書き込まれたことを示す」という性格規定は、ほとんど「ふーん」の性格付けとして役に立っているという実感を持つことができない。「DBに書き込む」とはいったいどういうことなのか。反応詞が、記憶システムとの関わりを持つと考えることは妥当だと思われるが、やや実証性に乏しいように思われる。

２−３．本稿での検討の手順と対象

この稿では、反応詞の用法を観察し、より実態に即した記述を目指したい。課題をあらため

て挙げる

1)「あ」系の語の性質

2)「あ」系と「は」系の異同

3)「は」系の語の性質

4) 日本語の反応詞の体系

以下､順にこの４つの問題について検討する。

また、富樫（2001）では、情報獲得にかかわる語とされる[iii]「あっ、えっ、おっ、ふーん、へえ、ほう、はーん、はい、うん、はあ」の10語が取り上げられているが、このうち、本稿で取り上げる語は、応答詞としての性格が強いと思われる「はい、はあ、うん、はーん」を除いた６語である。[iv]

６語のうち、「あ、え、お」を「あ」系、「ふーん」「へえ」「ほう」を「は」系と呼ぶことにする。また、富樫は、これらの語を「談話標識」と呼んでいるが、この稿では、より対象とする語の性質に近い用語という観点から、仮に「反応詞」と呼ぶことにしたい。

３.「あ」系の語について

３－１.「あ」

まず、「あ」について考える。

「あ」系が発話冒頭に現れるということにどんな意味があるのだろうか。この稿では、それは、新たな対象に意識が向けられたということを示すものだと考える。

富樫は、「あ」は「短期記憶にない新規情報を獲得したことを示す」としているが、あいさつに使われる「あ、どうも」という表現の「あ」が、情報獲得という概念で捉えられるとは考えにくいし、「あ、そうだ、今日は誕生日だ」というような思い出しの「あ」も、意識が何かのきっかけで「今日は誕生日だ」という記憶を焦点化したことと連動していると考えるほうが、われわれの直感にも合っているように思えるからである。情報云々が問題なのではなく、意識が、自分にとって意味ある対象を焦点化したというところにポイントがあるのではないかと思うのである。

心理の観点からは、意識や注意というものはどう捉えられているのか。神経心理学の立場から山鳥（2008）は、次のように述べている。

4ａ．われわれは覚醒している間、絶え間なくさまざまな対象を見たり聞いたりしている。つまりさまざまな知覚心像を生成し続けている。しかし、これらの外界現象のすべてを鮮明に捕らえているわけではない。必要に応じ、自分のそのときの行動に必要な対象だけを選び出して、その対象を鮮明化する。対象を意識の中心に持ち込み、ズームアップする。この対象の選択とズームアップに働くのが注意である。（ｐ.157）

ｂ．注意は外部刺激の正確な知覚に動員されるだけでなく、内的経験の鮮明な自覚にも動員される。（ｐ.159）

ｃ．意識（気づき）とは情・知・意から成り立つ膨大な蓄積のうち、今・ここで個体が必要とする部分だけを経験する働きである。（ｐ.206）

「あ」系が発話冒頭にしか立ち得ないのは、「あ」系が、4ａの言い方にならえば、注意の対象を「ズームアップ」した瞬間と連動しているからであろう。ズームアップの対象は、外界の事象だけでなく、4ｂにあるように内的経験の自覚、つまり「思い出し」などについても行われるわけで､「あ､忘れてた」というような「あ」もこのように考えれば説明がつくわけである。「あ、忘れてた」の「あ」は、情報の獲得を示すのではなく、今・ここで必要なコトガラに焦点を当てたということを示すものと考えるのが自然ではないか。

そして、重要な点は、「あ」は、4ｃにあるように、注意を向けるということは、「今・ここで、それが必要だ」という個体の判断に支えられているという点である。つまり、「あ」系は、無条件な「単純な」情報獲得などというものではなく、主体的な外界・内部とのかかわりの過程で現れるものと見るべきものではないかと思われる。

３−２．「え」

「え」も、発話冒頭にしか現れないという点で「あ」と共通するが、では「あ」と「え」はどのよう機能の違いがあるのだろうか。

結論的に言えば、「あ」は、今述べたように、「今・ここで・それが必要」なものに意識を向けるということと連動しており、新規な対象を焦点化するものであるのに対して、「え」は、なにかしら有標なコトガラの発生を意識が捉え、焦点化することと連動しているものということになろう。有標なコトガラとは、ここでは、通常の文脈あるいは既有知識からの予想に合わないコトガラということである。「あ」が、必要なものを焦点化し取り込む心の働きに対応するのに対し、「え」は、内外からの刺激に対してフィルターをかけチェックする心の働きと対応していると言えるのではないかと思われる。

例を挙げれば次のようになる。

5ａ．{＊あ・　え}、よく聞こえないんですけど。[v]

ｂ．{＊あ・　え}、それ、ほんとうですか。

ｃ．{＊あ・　え}、だれか私の名前を呼びましたか。

ｄ．{　あ・＊え}、そのネコ、手を出すと危ないですよ。

5ａは「聞き返し」と言われるものだが、トラブルなしに入力が行われるという無標の状態ではないという、有標事態の発生を示す反応である。5ｂは把握した内容が既有知識と整合しないという反応、5ｃは「カクテル・パーティー効果」と言われるものでもあるが、自分の名前が呼ばれることを予想しない場面での反応である。5ｄは、「え」が不自然なものであるが、不自然さの原因は、知識との齟齬などがないからである。

３−３．「お」

「あ」と「え」は、前節で述べたように、なんらかの対象に焦点が当てられるというところは共通しているが、「あ」は受け入れに進み、「え」は受入を一時中止するという点で違いが見られた。これに対して、「お」は「あ」と「え」のどちらともいくぶん異なる性質を持つ。次の例を見てみよう。

6.（レンタルビデオ店に入って）
{＊あ・＊え・　お}、新作が並んでるな。

7.（自宅。戸棚の中にインスタントラーメンを見つけて）
{＊あ・＊え・　お}、このラーメン、うまそう。

この例を見ると、「お」には一種の喜び、期待が感じられるが、「あ」「え」にはそのような情緒性、評価性は感じられない。その結果、「並んでるな」「うまそう」というような表出的な表現との共起性が弱く、不自然な表現になる。

だから、6、7を次のように、事象の描写、記述を中心とした、話者の情緒表出性の弱い表現に変えれば、「あ」の自然さも高くなる。ただし、念のため付け加えれば、「お」は6´、7´においても、情緒的、評価的な姿勢を示すものと解釈される。

6´ {あ／お}、新作がある。
7´ {あ／お}、ラーメンがある。

「あ」は、対象に注意を向けた際にはニュートラルで、なんらかのタグを付けるようなことはない。それに対して、「お」は、その意識対象についての評価情報を加えて認識するということなのだろうと思われる。

ここまでの「あ、え、お」に関する検討をまとめると、次のようになる。

8.「あ」系の語の示すもの

「あ」系に共通することは、主体にとって今ここで必要とする対象に意識を向ける際の反応であること。違いは次のような点である。

「あ」: 対象を新規なものとして捉え、取り込んだこと

「え」: 対象の受容に際して何らかの齟齬が生じたこと

「お」: 対象を情緒的、価値的に捉え、取り込んだこと

4.「あ、そうですか」と「そうですか」——「あ」の機能

前節では、「あ」系の各語の違いを中心に検討したが、さらに検討が必要な点がある。そのひとつが、インタビューなど、相手の話に注意を傾けて聞いていると考えられる場面で、とくに新しい対象が出現したというわけでもないのに、「あ」が現れることがあるケースである。このような「あ」はなぜ現れるのか、ここでは「そうですか」「あ、そうですか」の現れ方を手がかりに、この問題を検討する。

4-1. 会話での「あ、そうですか」「そうですか」の現われ

インタビュー型の会話では、いわゆるIRF構造[vi]のやりとりが多く現れる。9の会話例を例にとると、質問者「1」が質問を発し（I）、相手「2」が答え（R）、次に質問者がそれを受ける（F）という構造である。そして、そのFの発話に、「あ」が出現することが多いことが観察される。9の例はその典型で、Fに当たる部分ごとに、「あ、そうですか」が現れている。

9 1： （…）えっと、中川さんは、学生さんですか。
2： いいえ、働いています。
1： **あっ、そうですか。**えっと、／どんなお仕事なんですか。
2： えっと、日本語を外国人に教えています。
1： **あー、そうですか。**もうどのくらいになりますか。
2： い、えー、と、実際にちゃんとした形で教え始めたのは、今年といった方がいいと思います。
1： **あー、そうですか。**じゃあ、ちゃんとした形じゃない形っていうのは、もうだいぶやってらっしゃるんですか。
2： そうですね。去年もしていましたし、その前も少しはしていました。
1： **あー、そうですか。**あのー、まあ、色々世の中に仕事はあると…（KNm）[vii]

岡本・吉野（1997）は電話会話の冒頭に注目したものであるが、そこでは、電話会話に現れる「あ」について、次のように述べられている。

10.（「あ」は電話会話において、）相手の声を自分の手持ちの声のリストと照合して

探り当てたことを言語化し、相手にそれをメタメッセージとして伝える役割を担っていると考えられる。これは、単独では聞き取り表示としてしか機能しない「はい」が、「あ」を伴うことによってこの機能を果たすということからもわかる。特に、かけ手に比べ相手を予想しにくい受け手が「あ」を用いた場合、かけ手はそれによって「相手が自分を認定してくれた」という重要なメッセージを受け取ることになるのである。(pp.48-49)

「あ」は、相手の声によって相手を認識したというメッセージとなっているという分析であるが、「あ」に共通の特徴があるとしたら、9のような場面での「あ」についてはどのような機能があると考えるべきだろうか。この点を考えるために、「あ」が出現しない会話例と比較してみよう。

次の例は、いわゆる Yes-No 疑問文を軸とした IRF 構造を持つやりとりである。図式的に表せば、質問(I)－答え「そうです」(R) －フィードバック「そうですか」(F) という構造である。

11 1： あ、田中さんでいらっしゃいますか。田中さんは、学生さんでいらっしゃいますか？
2： はい、そうです。
1： **そうですか**。何年生で、しょう？ (RTm⑤)
12 1：(…) あーの、自動車免許を取るまでにまず時間とお金がかかる、(2：はい) ていうことが言われてますけれども、(2：はい) そういう、のの為にアルバイトのお金を使うんですか？
2： **そうです**。
1： じゃアルバイトは殆ど一年、通年、ですか？
2： そうです。一年間、やろうと。
1： **そうですか**。 (RTm⑤)

Yes-No 疑問文は、場合によっては、すでに予想されている内容を確認するために、なされることもあるものであり、その場合には、当然、情報の新規性は乏しくなる。特別な反応を示す必要がなくなるわけである。

なお、この稿での新規性という用語は、有意味で、個体にとって注目度の高いものという意味であり、単に新しいという意味ではない。

11、12の会話で「あ」が出現しないことの背景には、このような情報の新規性に関する事情があるのではないかと思われる。相手の発話内容の新規性が低いと感じる場合には、「あ、そうですか」ではなく、「そうですか」で十分なのである。

また、別のタイプの「あ」のない用例として次のようなものがある。

13 1 A： (…) 今滝本さんがお住まいでいらっしゃる所は、(2：はい) 集合住宅、でいらっしゃいますか？
2 B： いえ、一戸建てです。(ITf)
1 C： **そうですか**。(2：はい)

この例13の1Cには「あ」がない。1Cで「あ、そうですか」と「あ」を付けると、新規情報の受け取りを意味する「あ」によって、「一戸建て」が新規な情報、意外な情報であるという含意を持ってしまう。13に「あ」がないということは、そのような含意の発生を避けることが、ポライトネスの観点からも必要と判断したからだと考えることもできよう。

11, 12のような確認的な質問への答えに比べて、9のようなWH疑問に対する回答は情報の新

規性が高いため、「あ」が出やすいのではないかと考えられる。13は、ポライトネスの観点から、確認的で新規性の弱い質問扱いになっているのである。

以上のように考えると、「あ」は、単に新たな対象に注意を向けるだけでなく、「今・ここで」必要なものであるとする判断、つまり、「今・ここで必要」なものという新規性への判断に支えられて現れるという8の観察が支持されるように思われる。

４－２.「あ」と定位反応

このような「あ」の使用は、言語という閉じられた系の中だけの現象ではなく、内外からの刺激に対するヒトの身体的な反応という側面を少なからず持っているように思われる。生理心理学の分野では定位反応（orienting response；OR）と呼ばれる反応の存在が指摘されているが、「あ」についてのここまでの観察と重なるところがあるように思われるのが、このORというものである。それは、14ａのような特徴を持つものであり、14ｂに述べられているような「慣れ」とのかかわりを持つものである。

14ａ．①感覚刺激の種類を問わず(非特異性)、②環境条件の変化（新奇性）によって生起し、③中程度以下の強度の刺激に対して感覚器官の感受性を強める機能を持ち、④体性神経反応(耳・目など身体の運動)、自律神経反応（唾液などの分泌反応、皮膚電気活動や心臓血管系活動）、中枢神経系反応（脳波変化など）の複合反応として出現する。⑤刺激の反復など環境条件が固定化すると減衰したり消失する。これを慣れ（habituation）とよぶ。しかし、環境条件や生活体の状態に何らかの変化があれば、それに対してORが回復したり新たに生起する。（宮田1997による）

ｂ．刺激が絶えず変化していても、そこに一定の文脈があれば慣れが生じるし、文脈が変わればORが生起してくる。たとえば、数字を順に10、11、12、……と呈示していくとSCR[viii]の反応量は減少するが、本来“20”が呈示されるべき試行で“21”を呈示すると反応量が増大する（Yaremko et al.、1970）。このことは、ORの生起や慣れが刺激系列全体に対する構え（set）の形成に関連し、刺激の物理的特性のみの反映ではないことを示唆している。（同）

これらの記述から、「あ」についての観察を振り返ってみると、ヒトは新規なものに遭遇したときに何らかの反応を示す、また、その反応が刺激への感受性を高めるというこの記述は、ここまでの「あ」についての観察ときわめて近いものであるように思われる。「あ」というのは、言語記号のひとつではあるが、同時に、身体的な反応も含んでいるものであり、身体的にORを引き起こす刺激のひとつとして検討することが必要であるということであろう。

４－３．「あ」の機能の再解釈

とすると、「あ」のない「そうですか」は、一種の慣れを含んだ反応と見ることもできよう。岡本・吉野（1997）では、親族同士の電話冒頭では、相手の認識に際しても「あ」が出現しないと述べられているが、それは、慣れを含んだ刺激として出現するからではないかと思われる。

反対に、次のような「あ」は、談話のステップの変化の認識に基づく「あ」であり、環境の変化を認めた上での反応の例だと思われる。

15 1：　あの、じゃあいい旅行になるように祈っております。
　2：　はい。
　1：　今日は本当にありがとうございました。
　2：　**あ**、どうもありがとうございました。(MAf)
16 1：　今日はあのわざわざ（2：ええ）おいでくださってどうもありがとうございました。
　2：　**あ**、いえ。どういたしまして。（1：はい）失礼します。(MNf)

さらに例を挙げれば、次の17の「あ」は、質問に答える側の「あ」であり、IRF構造で言えば、Rの位置に現れる「あ」である。質問されるということは、一種の新事態であり、インタビューなどの公的な性質を帯びた場で、立場が下の話者は、慣れを避けて、質問ごとに新たな状況であるという緊張を表示することになるのではないかと思われる。

17 1：(…) じゃ大学院生っていうことは（2：はい）その就職、学部を卒業なさる時にね（2：あ、はい）就職活動っていうのは全然なさいませんでしたか？
　2：　**あ**、全然しませんでした。ええ（1：そうですか）はい。
　1：　お友達などは？
　2：　**あ**、はだいたいしました。(…) (MNf)

ここまでの検討をまとめると、次のようになる。

18.「あ」の性質
　a.「あ」は、主体内外の環境の変化（新規性）に対する反応として現れる。環境の変化（新規性）の度合いの認識は、主体の判断によっている。
　b.「あ」は、環境の変化（新規性）を受け入れ、その変化への対応と連動する。

「え」「お」についても、18 a 、b は適用され、違いについては、ここでは8での記述に止めておくことにしたい。

5.「は」系語について

5－1.「あ」系と「は」系の異同

次に、「あ」系と「は」系との異同を見てみる。

「あ」系「は」系の共通点は、独り言に現れるという点であるが、それに対して、相違点として挙げられるのは、それぞれの出現の位置の違いである。「は」系は、発話末に出現可能だが、「あ」系は不可能である。これは、1´に示したように、富樫の分類基準①によって区別されるものである。

例を挙げれば、次のようなものである。19 a 、b は作例、19 c 、20は富樫（2001：30）の例である。

19 a ＊飛行機だ、**あっ**。
　b ＊もう終わり、**えっ**。
　c ＊このラーメン、うまそう、**おっ**。
20 a．やっぱりね、**ふーん**。
　b．なるほど、**へえ**。
　c．?そうだったのか、**ほう**。

筆者の語感では20 c はやや不自然であるが、このようないくぶんかの不自然さはあるとはいえ、19の３つの例に比べれば、20 c の許容度は高いとすべきだろう。

これは作例であるが、実際の例でも、この傾

向は確認できる。次の21，22では、「あ」系と「は」系が予想された位置に出ていて[ix]、２つの系のタイミングの違いを反映する、興味深い例である。21の1Cでは「ああ、なるほど」のあとに「ふーん」が、22の1Dでは「ああ、そうですか」のあとに「へえー」が出現している。

21 1A：(…) どっかで連載（２：はい。）っていう形で､それを最後に編集したもの。
　2B： はい。本として出ている。
　1C： **ああー**、なるほどね。**ふーん**。じゃあ、その人がどういう、あの、まあ、背景を持った人かって言うのはちょっと分からないですね。　(KNm)
22 2A：(…) ５月に、あの『ジキルとハイド』を、公演しまして、(…)
　1B： ええ。どこでやったんでしたっけ。
　2C： ええとー、ディッフェンドルファー記念館の、(１：ああーあそこ) オーディトリアムで。
　1D： **ああー**、そうですかー。**へえー**。で音楽は誰が付けてくれるんですか？　(NFm)

この例は日本語が、少なくとも２つのタイミングでの反応形式を持っているということを示すものである。「あ」系は23a、「は」系は23bにかかわるものである。

23. 反応詞が示す反応のタイミング
　a．対象へ注意を向ける瞬間
　b．対象を取り込んだ後

タイミングの違いは、当然、情報処理のされ方の違いにもなっていると予想される。この点について、富樫（2001）は、２つの系の違いについて、「バッファへの書き込み」「DBへの書き込み」（１節の２参照）というように、いわば情報の貯蔵場所に違いを求めているが、このような捉え方が妥当か、以下に検討したい。

５－２．「は」系に共通の特徴

では、発話の後に出現可能であるという性質は､「は」系の語の性質にどのように反映されているだろうか。ここでは二つの違いを挙げておきたい。

ひとつは、入力情報の評価に対して、留保的な姿勢を示すということだと思われる[x]。このことは、次のような後続文との共起制約によく現れている。

24 a．{　**ふーん・　へえ・　ほう**　}、そうですか。
　b．{　**ふーん・　へえ・　ほう**　}、そうでしたっけ。
　c．{　**＊ふーん・＊へえ・＊ほう**　}、そうですね
　d．{　**＊ふーん・＊へえ・＊ほう**　}、そうでしたね。

「は」系は、24a「そうですか」、24ｂ「そうでしたっけ」のような、態度留保的な表現とは共起可能だが、24c「そうですね」、24d「そうでしたね」のような同調表現とは共起しにくい。

もう一つは、「は」系は、刺激が外部からのものに限られるという点である。外部からの刺激とは、他者の発言内容、他者の評価など、何らかの形で、他者がかかわる情報である。思い出しなど、話者の内部で生まれる刺激とは異なるものである。そして、他者がかかわるとは、話者自身の挙証責任がないということであり、このことが、対象と距離をおいた、評価的な姿勢を可能にする素地となるのだろうと思われる。

このような共通性を持ちながら、またそれぞれ違いも持っている。その点を以下に述べる。

５－３.「ふーん」と「へえ」

まず、「ふーん」であるが、その特徴として、懐疑的な姿勢が強いという点が挙げられる。そのため、驚き、感嘆の表現としてはなじまないことになる。25、26では「ふーん」も可能だが、「へえ」が示すような驚きや感嘆は感じられない。（「＃」は表現として不適格ではないが、当該の表現としては不成立であることを示す。）

25. 子ども：テスト、100点だったよ。
　母親　：｛　**＃ふーん・　へえ**　｝。
26. A：この会社は、社長が朝いちばん早いんだって。
　B：｛　**＃ふーん・　へえ**　｝。

感嘆のためには、その情報を真として肯定的に受け入れる必要があるが、「ふーん」はそのような姿勢がないからであり、情報を受け入れることへの留保が強い。この姿勢は、次のような、感情に関して中立的な情報に接したときにも現れる。

27.（「イクラ」はロシア語だという説明を読んで）
　｛　**ふーん・へえ**　｝、イクラって、ロシア語なのか。
28.（友人がマラソンを完走したと聞いて）
　｛　**ふーん・へえ**　｝、すごいね。

留保の動機は一様ではない。例25なら意外の感じ、26ならそのコトガラの意味についての不審の念、27はそれを知らなかった自身の知識のなさに対する憮然の感、28はそれを賞賛する世評への否定的感情など、人により場合により、さまざまな留保が付けられる。このような何かしらの留保があり、その中でもより強い留保を示すというのが「ふーん」なのではないかと思われる。

富樫（2002）は、「ふーん」には「何らかの評価的な表現、提示された情報に対する何らかのコメントといったものは後続しにくい」（p.101）と述べているが、評価表現と言ってよいと思われる表現が後続する例は、珍しくはない。次の例は国語研究所『少納言』にあったものである。下線部の表現は、評価的な表現と言えるだろうと思う。

29. 最初は、３件が１分置きぐらいに来た。
　ふーん、やってくれますな～。
　（有本信雄2002）[xi]
30. ああ、そっか、お姉さん絵描いてるんだ。
　ふーん、いかにもって感じだね
　（谷村志穂1992）

これらはどちらも情報へのコメントであるが、その背景に、対象となっているコトガラの受け入れに抵抗を示すところに特徴があるのである。

一方、「へえ」は、「ふーん」と違って、受入への抵抗感は弱い。あるコトガラが成立したことそのものの意外さを示すことはあっても、成立したことそのものを受け入れることについては抵抗は相対的には弱いのではないかと思われる。

31 a.｛　**ふーん・＊へえ**　｝、これは困った。
　b.｛　**ふーん・＊へえ**　｝、まずいことをしてくれたものだ。
　c.｛　**ふーん・　へえ**　｝、この人、お菓子やさんか。　（仁木悦子1999）
　d.｛　**ふーん・　へえ**　｝、俺ってアルバム全部持ってたんだ。（辰巳渚2000）

「へえ」が賞賛、感嘆を示すように見えるのは、とりあえず情報を受け入れるという姿勢を示す語だからだろうと思われる。それが25〜28や31ｃ、ｄの肯定的に見える評価につながっている。

ただし、とはいえ、評価性、留保感がないということではない。27、28を変形させた次の例を見るとわかるように、「お」と比べると直接性はなく、一種の留保感を伴っている。「へえ」の持つ留保感は、意外性から来るもののように思われる。対象が、予想外のことであったというような場合に、出てくる留保であり、「ふーん」が持つ懐疑的なニュアンスとは異なるものに思われる。

27´｛　おっ・へえ　｝、イクラって、ロシア語なのか。

28´｛　おっ・へえ　｝、すごいね。

５−４．「ほう」

「ほう」の用法として多いものは、32、33のようなものである。(なお、原文では「ほう」であるが、比較のために「ふーん」「へえ」も示す。)「ほう」は、待遇的に優位な立場にあることを意識しつつ、先行内容を、暫定的留保的に許容し、受け入れるという姿勢を示す反応である。

32.「はい、陛下は、男なのか、女なのか、それを教えてくださいと申し上げました。」
「｛　ほう・ふーん・へえ　｝、面白いことを訊く。」　(久世光彦1996)

33.「行きました」と彼は答えた。「｛　ほう・ふーん・へえ　｝」、と刑事たちはからかうように互いに顔を見合わせた。
(小池真理子1993)

32の「ほう」は、とっぴな質問について、とりあえず認めておこうという姿勢、33の「ほう」は「からかい」の姿勢を示している。いずれも、立場が上のものから下のものへ、というような立場上の優位性を背景に、暫定的な許容を示すものとして「ほう」が用いられている。

また、次の例では、「ほう」は、相手の発話内容が、常識を超えたものであるという驚きを示すものとして使われている。が、「え」「へえ」などとは異なり、暫定的な許容というところに「ほう」使用の理由があると思われる。

34１：　人気があるというのは時給がいいということ？
２：　そうですね、だいたい、12時間か、もしくは24時間かというコースで、ま、その分非常にお給料は高くて、（１：うん）高いと24時間で３万円、12時間で（１：ほうー）ま、１万５、６千円つくので。(…)（北九州MOm）

35２：(…) 僕ら、が大学、生だった頃と随分違うなっていう感じがしますね（１：んんー)。でー、実際授業のなかでベルとか、携帯が鳴っちゃうことも時々あるんですけれども。
１：　はい、授業中にですか。
２：　ええ、授業中に（１：ほー）ピコピコ鳴っちゃうこともあるんですけどね（１：はい)。(…)（北九州TOm）

また、先行文脈を暫定的に許容するという性質は、後続文に制約を持つことになる。先の28の例について「ほう」を入れてみると、次のように、不自然になる。

31´ａ．｛　ふーん・＊へえ・＊ほう　｝、これは困った。

b．{　ふーん・＊へえ・＊ほう　}、まずいことをしてくれたものだ。

これは、「ほう」が先行文脈をとりあえずは肯定するという姿勢と矛盾するからであろう。

ついでに言えば、「へえ」と「ほう」は、先行文脈の暫定的肯定という点で共通していることがわかる。どちらも留保つきではあるが、いちおうは先行文脈を肯定するわけである。それに対して、「ふーん」は、否定的な姿勢を示しているのである。

また、「ほう」は、「は」系の中では、発話末での出現の不自然さが高いという点で特徴がある。

22´２：(…)　５月に、あの『ジキルとハイド』を、公演しまして、(…)

１：　ええ。どこでやったんでしたっけ。

２：　ええとー、ディッフェンドルファー記念館の、(１：ああーあそこ) オーディトリアムで。

１：　ああー、そうですかー。{　ふーん・へえー・＊ほう　}。で音楽は誰が(…) (NFm)

この22´の例では、原文は「へえ」であるが、「ふーん」への置き換えはできそうだが、「ほう」への置き換えは不自然になる。「ほう」は、刺激に対する即時的な反応という面を持っているからではないかと思われる。その点では、「あ」系に近いように思われる。その意味では、「は」系の中で「ほう」はやや性質の異なるものであり、「あ」系の中で「お」がやや異なる性質を示すのと並行的でもある。

「は」系の各語の性質をまとめると、次のようになる。

36.「は」系の語の性質

a．各語に共通する特徴

・外部刺激についての、取り込み後の反応。

・外部刺激への評価について、留保的な姿勢を示す。

b．各語の特徴

ふーん：より強い留保を持ち、懐疑的な姿勢を示す。

へえ　：意外なものだが、受け入れ可能という姿勢を示す。

ほう　：相対的に優位な立場からの暫定的な許容を示す。

６．おわりに

６−１．「あ」系の機能と日本語の反応表示の体系

この稿では、日本語の反応詞について概観してきたが、さいごに先行研究との見解の違いをまとめておきたい。

富樫（2001など）では、「あ」系は、バッファ（短期記憶）内にある情報との一致度の高低に従って「あ」「え」「お」のいずれかが出現するという分析だが、本稿では、「あ」系反応詞は、8に示したように、“主体にとって今ここで必要とする対象に意識を向ける”というときの反応であると考えた。その根拠となる事例のひとつは、「あ、ありがとうございます」のような儀礼表現の「あ」である。この「あ」は、必ずしも短期記憶内の情報との一致は問題にならない。

「あ」系反応詞の機能は、内外の環境変化に対応するために、主体にとって有意味な刺激に対して、意識レベルを高めるというところにあるのではないかと思われる。

それに対して、「は」系の主たる機能は、対象を受け入れるかどうか、その判断を暫定的に留保するというところにあると思われる。

「あ」系は、ヒトが生物として、社会的存在

として生きていくうえで基本的な生理的仕組みと連動したものであり、「は」系は、即時的に判断ができないモノゴトへ対応するための道具として働くものと見ることができよう。

6－2．今後の問題

この稿の出発点は、「あ、バスだ」「あ、ちょっと待ってください」などの「あ」がなぜ現れるのか、どんな役割を果たしているのかという疑問だった。このような疑問に対して、「あ」は「驚きを表す」（森山1989）という説明が与えられることもあったが、しかし「あ、どうも」などの「あ」までを驚きの表現とすることに素朴な疑問を感じた。また、社会的な儀礼として「驚き」という「態度の表出」をするというような説（定延・田窪1995）もあったが、十分には納得できなかった。さらに、情報処理モデルを用いて分析しようとすることについても、実態から遠ざかってしまうようにも思われた。「あ」という語は、ヒトの意識の動きと強く結びついているのではないかという直感から離れられなかった。

この稿で、当初の疑問が解決したとは思えないが、「あ」などの反応詞については、ヒトの生理的なメカニズム、社会活動上のストラテジーというような、ヒトの存在を支えるものとしての反応機構全体の中で扱うことができるのではないか、という感触はつかめたように思う。

しかしまた、この「あ」は、他言語にも存在するかどうか、もしあるのであれば、どんな音で実現されているか、もしないならば、日本語ではなぜ出現するかなど、興味深い問題である。また、神経心理学、生理学など他分野との共同が、反応詞の分析には欠かせない。今後、その可能性を探りたいと思う。

＊参考文献

岡本能里子・吉野文（1997）「電話会話における談話管理－日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析―」『世界の日本語教育』７：45-59.

定延利行・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構――心的操作標識『ええと』と『あの（－）』――」『言語研究』108：74－93

田窪行則(1992)「談話管理の標識について」『文化言語学－その提言と建設』：1110－1097、三省堂

田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』257－279、くろしお出版

富樫純一（2001）「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6：19－41

――　（2002）「談話標識『ふーん』の機能」『日本語文法』2（2）：95－111

――　（2005）「『へえ』『ほう』『ふーん』の意味論」『言語』34（11）：22－29

森山卓郎(1989)「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』１：63－88

宮田（1998）宮田洋（監修）藤沢清・柿木昇治・山崎勝男『新生理心理学２巻生理心理学の　基礎』北大路書房

山鳥　重(2008)『知・情・意の神経心理学』青灯社

――（2011）『心は何でできているのか　脳科学から心の哲学へ』角川選書

＜注＞

i　『新日本語のきそ』題２課。会話文での受付の人の発言。

ii　表は、富樫（2001）の記述にしたがって小出が作成。

iii　「はい、はあ、うん」は、「基本的には独り言では用いられにくい」（ｐ.25）とされながら、同じ論文の中で、独り言でも出現するとされている（ｐ.34）。また、「はーん」は「微妙であるが」（ｐ.33）「ふーん」と同じグループに属するとされているなど、区分が不安定な点もある。

iv　富樫は、「はい」について、「（ひとりで論文を読みながら）「はい、はい、なるほど」と言えるとして、独り言でも出現するとしているが、これは、擬似的な対話用法とも考えられる。

v　富樫（2001）は、「え」が「バッファにある情報と新規獲得情報との一致率が低いことを示す」（2参照）と述べているが、この考え方では、5ａのように、入力そのものに問題があるときの「え」は説明できないように思われる。

vi　IRF構造とは、Initiation（始発）、Response（応答）、Feedback（後続発話）という３ターンで構成される会話構造。

vii　この記号は、『インタビューによる日本語会話データベース』（北九州市立大学）の話者を示す。以下、会話例の後に（　）のあるものは、このコーパスからの引用であることを示す。

viii Skin Conductance Response（皮膚伝導度反射）の略

ix　例21，21の「ああ」も、「あ」系と同じ機能を果たしているものと見ることにする。

x　この稿では、「はあ」は応答詞に属するものとして検討から除外しているが、「はあ」も「は行」に属す音であり、留保性を持つ点で共通性がある。「あ」と比べるとそれが感じられる。

　ａ．あ、そうですね。

　ｂ．はあ、そうですね。

xi　以下、（作家名・年号）の形で示したものは、国語研究所『少納言』からのデータである。